

一つの孤独な生涯

※そう言われてみると、イエスという人物は、家族もなく、大学にもいかず、1冊の本も書かず、戦争で敵に勝利したわけでもなく、偉大な発明をしたわけでもなく、歴史に出てくる英雄たちとは全く違った。ただ語った言葉と行いだけで、歴史上最も大きな影響力をもつ存在となった。

◆ 一つの孤独な生涯の文章を読んでから、下記にある質問に答えてください。

世に知られぬ小さな村に、ユダヤ人を両親として生まれたひとりの男がいた。母親は百姓女であった。彼は別の、これまた世に知られぬ小さな村で育っていった。彼は三〇歳になるまで、大工の小屋で働いていた。それから旅まわりの説教師となって三年過ごした。

一冊の本も書かず、きまった仕事場もなく、自分の家もなかった。家族をもったことはなく、大学にいったこともなかった。大きな町に足を踏み入れたことがなく、自分の生まれた村から二百マイル以上そとに出たことはなかった。偉大な人物にふつうはつきものの眼をみはらせるようなことはなに一つやらなかった。人に見せる紹介状なぞなかったから、自分を見てもらうことがただ一つのたよりであった。

はだか一貫、もって生まれた力以外に、この世との関わりを持つものは何もなかった。ほどなく世間は彼に敵対しはじめた。友人たちは皆逃げ去った。その一人は彼を裏切った。彼は敵の手に渡され、まねごとの裁判に引きずりだされた。

彼は十字架に針づけされ、二人の盗人の間に立たされた。彼は死の寸前にある時、処刑者たちは彼が地上でもっていた唯一の財産、すなわち彼の上衣を、くじで引いていた。彼が死ぬと、その死体はおろされて、借物の墓に横たえられた。ある友人のせめてものはなむけであった。

長い一九の世紀が過ぎ去っていった。今日、彼は人類の中心であり、前進する隊列の先頭に立っている。かつて建設されたすべての海軍、かつて開催されたすべての議会、かつて統治したすべての王たち—これらをことごとく合わせて一つにしても、人類の生活に与えた影響力において、あの孤独な生涯にとうてい及ぶもつかなかった、といってもけっして誤りではないだろう。

これはイエスの生涯のまことに美しい描写である。

- ① この文章を読んでこれがイエス・キリストのことであることにどこで気がついただろうか？
- ② この文章のタイトルは「一つの孤独な生涯 (Solitary Life)」とあるが、この訳は果たして適当だろうか？ ほかにより訳はないだろうか？
- ③ この文章にはイエスの生涯のある大事な部分が書略されている。なぜ省略されていると思うか、想像してみてください。
- ④ イエス・キリストについて知っていること、学んだこと、疑問に思うことなど、100字でまとめ、書いてください。(50分以内でやるので、時間を見ながらやってくださいね)